

第3回「愛猿記賞」(エッセイ部門)【大賞】

「^ふ ^{ばこ}文箱の中」 福岡県 ^{ほこしま} ^{はちろう}箱島 八郎

大正元年、江東区^{ふかがわ}深川生まれの母が死んで二十年になる。よく^{かんとうだいしんさい}関東大震災の話をしていた。^{すみだがわ}隅田川の橋が落ちてガス管か水道管だけが対岸に^{つな}繋がっていた。猛火に追われその鉄管を伝って深川から日本橋の方に渡った。十二歳だった母は祖母が穴あき^{どうか}銅貨をヒモで繫いだ^{ぜんにん}銭輪を首にかけて鉄管を這って渡ったその銭輪の重かったことをよく語ってくれた。家財道具は祖母が背負ってガス管を渡ったらしい。その時運んだ^{ほこ} ^{きんまきえ} ^{ふぼこ}金時絵の文箱が残っている。浦島太郎の玉手箱のよ^{ひも}うに絹の紐で閉じてある。開けると煙ではなく^{べっこう} ^{かんざし}鼈甲の簪と一枚の^{こせき}戸籍の写しが入っていた。^{しぞく} ^{てつたろう}士族永井鐵太郎二女フミと母の名が記してあった。

「うちはお^{きむらい}侍だったのか」

「そうよ。お^{はたもと}旗本だったのよ。^{びんぼう}貧乏だったそうだけどね。永井のおばあちゃんによく聞いたよ」

中学生のころ、九つ違いの姉がそんな話をしてくれた。

^{ごいっしん} ^{ろく}御一新で^{ろく}禄を失い。その日から食うに困ったひい^{じい}祖父さんが家財道具を売って米に変えていたそう。文箱はその売れ残りだった。住んでる家を売りに出したら売れずに、一部を解体して^{せんとう} ^{たきぎ}銭湯に薪として売ったと言う。そのひい祖父さんの^{みうち}身内に上野の山の戦いに兄弟で参戦して敗走、^{はいそう} ^{ひじかたとしぞう}土方歳三のように^{ごりょうかく}五稜郭ま

で転戦した人がいたと聞いていた。敗戦後北海道に残り、漁業に従事してニシン
漁で当てて、ニシン御殿を立て、ずいぶんと羽振りが良かったそうだ。関東大
震災で焼け出された母の一家は函館までお世話になりに行ったと聞かされた。

愛読していた子母沢寛の〈新選組始末記〉の巻末に尾崎秀樹が書いた解説を思
い出させる。子母沢寛のお祖父さん、梅谷十次郎は上野のお山の戦いに参加し、
敗れて函館の五稜郭で政府軍と戦った。投降して苦勞の末に網元になって敗残
兵の仲間とニシン漁場で一家を成したと書いてある。ひょっとして、その仲間の中
に、永井のひい祖父さんの身内がいたのではないだろうか。あまりにも話が似
ているので驚きながら、子母沢寛という作家に親近感を抱くようになった。子母
沢寛も育ての親、祖父、梅谷十次郎の残影を追って本所深川界隈を歩き回り、小
説〈父子鷹〉の勝小吉にその姿をダブらせたに違いない。私も閑を見ては古本屋
で買った江戸切り絵図を片手に幕末期の本所深川地区を探索して歩いた。絵図
の中に永井某の住まいを見てはひょっとしてこの中にひい祖父さんの名前があ
るのではないかと子母沢寛の心になって歩いている自分がいた。富岡八幡宮前
のお店で、名物深川丼を食って上野公園まで足を伸ばした。境内の片隅に戊辰
戦争黒門口での戦いの戦死者の慰霊塔があった。幕府側の戦死者の中に永井
角之進という名に行き当たって仰天した。

「やはり居たのだ。永井のひい祖父さんの身内が彰義隊に」

子母沢寛氏と心が繋がった一瞬だった。